

雪の二ノ搭三ノ搭を歩き、疲れた体に鍋焼きうどん

## 丹沢表尾根から鍋割山

実施日 2015年2月14日(土)～15日(日)

天候 14日 晴れ/15日 晴れ

リーダー 遠井 謙策

参加者 島本陳重、遠井謙策、中村友子、石原勝正、宇野輝代、佐藤政司、小名秀鋭、瀧澤きよの 計8名

費用 交通費3,220円(新宿起算、タクシー代含む)、宿泊費6,500円

計9,720円

タイム 2/14 秦野駅(8:15タクシー)富士見山荘(8:55)二ノ搭(10:20)三ノ搭(10:40)烏尾山(11:20-11:50昼食)新大日(13:15)搭ノ岳(14:05-14:30)小丸(15:20)鍋割山山荘(15:45)  
2/15 鍋割山荘(8:00)後沢乗越(8:50)栗ノ木洞(9:20)櫟山(9:40-10:15)寄(11:30バス)新松田駅(12:00)

2/14 バレンタインデーという日に余り興味が無くなってからどの位になるだろう。今や貰う義理チョコを負担にすら感じる。ときめくハートや柔軟な行動力を持ち続けたいのだが。。。！？

そんな日に計画したのが去年すっかり嵌ってしまった雪の丹沢。ところが今年のそこには期待した白銀の世界は無かった。まばらな雪と泥んこ道は、唯一秘めていた憧れを無残にも粉々に踏み砕いてしまった。

傷心のリーダーと手を挙げた7人の剛脚は、ヤビツ峠を少し下った標高708mの登山口から登り始めた。春を感じる陽光を背に行くと間もなく、PE袋に入った「石」を配るおじさんに遭遇。二ノ搭付近の崩壊修復に使用する為で、登山者に運搬協力を仰いでいるとの言。早速のボランティアで登山道整備に一役(それ程

でもないか)。

やがて登りが急になってくる辺り、若干だが積雪や凍りついた道が現れアイゼンを装着する。暫く急登が続き息が上がってくるが、明るい青空と後方眼下の江ノ島や駿河湾に励まされ二ノ搭へ。石を納め、もうひと下りとひと上りで三の搭。

ザックを降ろし定番の雄大な富士をバックに最初の集合写真。それにしても広くて見事な裾野だなあ！一息つ

いた後、名物のお地蔵さんに挨拶し、正面に見える搭ノ岳目指し急坂を一気に下る。この辺りは雪が氷つき注意を要するがアイゼンが効いて快調だ。登り返したところが烏尾山。緑の三角屋根の小屋前



に各自陣取り楽しいお昼。左に越前岳を従えているここからの富士も悠然として素晴らしい。

このコースは登下降の繰り返しだ。疲労がジャブのように利いてくる。

行者ガ岳を過ぎる頃、今度はちょっと厳しい鎖場だ。若干ながら渋滞している。普段なら容易であろうがやはり凍りついている急な岩場、十分に注意して降りる必要がある。ただ我々猛者連は難なくこなし新大日へ到達した。

木ノ又大日に至りやっと雪山らしいサク





サク道に出た。今回山行の最高地点搭ノ岳山頂は目の前だ。見慣れた標柱の周りには大勢の登山客。若い人が

目立つ。積雪は少ないが気温は低い。

尊仏山荘に寄り400円の甘酒で体を暖める。

泥濘の大倉尾根を下り金冷し分岐で右へ折れる。こちらの道は、陰になっている分心地良い程度の雪が残っている。



緩やかに上下する道を気持ちよく進む。大丸・二股分岐・小丸を通過して15:45今宵の宿鍋割山荘へ到着。建屋は

余り綺麗ではなく部屋も寒く布団も冷たかったが、鍋を囲んでの夕食は天麩羅やおでんのサービスも加わり、山荘の女将や他の客と一緒に大盛り上がりの大宴会となった。

外に出てみる。山上から見上げる星空と見下ろす街の明かりは火照った顔を何故か感傷的にする。



2/15 明けて早朝、東の山影から鮭色の太陽が姿を見せる。その真円が紅に変る頃、「すわっ、赤富士か」と期待したがなかなか。ほんのりと頬染めただけの

初心な山で終わってしまったが、それはそれ胸がキュンとなる。さて、今日は余裕の行程、ゆっくりと朝食を摂りキーンとしばれる空気の中を下山する。後沢乗越へと長い急坂を下る。アイゼンは全く不要。山荘の親父さんが60kgをボッカして登ってきた。二股分岐を左に分け直進する。凍結した登りにちょっと手こずるがすぐに栗ノ木洞。進んで南面に出るとそこは櫟山。うららかな陽溜りの小広の枯野に寝転がってのコーヒーブレイクだ。そして、



杉林を抜け土佐原の集落を通過、茶畑の広がる「寄」の町に出る。折から蠟梅まつり開催中で特有の香りが鼻をくすぐる。黄色い花が満開で一足早く思わぬ春を享受できたことは嬉しいおまけ！

二月の厳しい寒さと春のような陽気、山かげの雪と氷の堅く締った道と泥田のようなぐじゃぐじゃ道、時と場所で次々と変化する様は、まるでアドベンチャーゲーム。でも、手頃な人数で盛り沢山の経験が出来たこの両日は、とても充実した2日間ではなかったのでは！？個人的には、久しぶりの山行だった為か翌日は筋肉痛で、階段を下りるのに手摺があんなに頼りになるのかと、思わぬ発見をした山旅だった。



(記&写真・遠井 謙策)  
(写真提供・石原 勝正)